



和漢文抄

論類
解類
歲類
記類

六



5
2236
6



門八利五
2296
卷



和漢文操卷之六

○論類

佐利論



張昇甫

世より酒のうらみは酒を唐のたれとて
下もその風流とせられも唐土の侍人の様
とせし或る所の能階解を佐利の思ひなり
されけは世の世より酒を唐土の侍人の
より酒のたれとて唐土の侍人の様なり
きつるに唐土の侍人の様なり

和漢文操

そし各もさるりそをけあふんまゝに持とるお
かりも弄さるる院籍にほれ起れしけ瀬の
しちちれく起れふんめい海をさし世利の極はけ
うてまらう海の流りとすらんはうし没やその客
ありく氷とくくまき書とはらふおし藤おきり男に
佳利とくくくく書とけりおとくはくはく
ゆりまされ金のけりゆいさきくわおわけの所た
まふんもさるやうに佳利の事おとけり表の程の
りてさるるうくさるめゆめゆめあくとおとる
部はくけりうも本地しお梅の事日月くられおふ

罪人の業ふははるるけりかけ流のらまもあ
ねるふとくお佳利とけりちるおおのけりや
わしうもやきくはけり種も種あふちるわん種
もお梅の業ゆふきくく武渡の市く書うあつおと
層コモかありの名くまきけりるあまの言めくもあつ
業もかを種カキの種はくまもあふいあつ流のけり藤
さしけりくは佳利を能流所とあつらう世利めさしと
まらうより類織の林しおああ海とあつち書茶の
かむに書合の益とけりれくくも書やまてく大書
うして二平二流の書月とけりくくを固ニキヒ書し帆の

○ 述べ論を好より後すく得と便利なるを望み海に
 人向しと此矣と云はれしを以て其の意を以てし
 及びしを以てし其の意を以てし其の意を以てし
 名も其の意を以てし其の意を以てし其の意を以てし
 して設論の辨を以てし其の意を以てし

論論

岸倚彦

いふ一より説くつに月おる兼け末の願
 神祇教を論じらるるに其の意を以てし其の意を以てし
 人の意を以てし其の意を以てし其の意を以てし
 日おるつに其の意を以てし其の意を以てし其の意を以てし

論と云はるる言を以てし其の意を以てし其の意を以てし
 あつて其の意を以てし其の意を以てし其の意を以てし
 へし其の意を以てし其の意を以てし其の意を以てし
 物も其の意を以てし其の意を以てし其の意を以てし
 花も其の意を以てし其の意を以てし其の意を以てし
 らし其の意を以てし其の意を以てし其の意を以てし
 きも其の意を以てし其の意を以てし其の意を以てし
 我家の意を以てし其の意を以てし其の意を以てし
 と云はるる人の意を以てし其の意を以てし其の意を以てし
 其の意を以てし其の意を以てし其の意を以てし

支那雜考

三

そしつはつたて人の遊ふ一りつらふし連ふ七振
舞ふ月世の世をよあふたれし能治さし園の
舞をちまふあしをのまれちと命にたれし度あけなれ
高として響ひるの論しつらふし

○註曰はれし所は庭にたおのそふしつらふし
一戸のおおまらあつらひの庭のまらあつらひ
もんのまらあつらひあつらひあり△あまの舞
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
顔回ト伯王ト愚ラ言玉リ▲園庭ト八舞ノ花生ノ各三ナ
中書 井師

跡先ノ知トスト云フ意ナリト然凡世論ニ軌ニ誦論ノ各ヲ假
テ園ノ二子ヲ寄セたり花生ノ各ヲ称スニ作ストリ

○傳云はれし論を例のまじり月おとれし肉のお
とちあふにたれしのは作とあつらひあつらひあつらひ
一段より二百余段の西書よりの儒師の詞と軌舞して
はれし一舞のまじりとまらあつらひあつらひあつらひ
あつらひ園の二論をかまらあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
とちあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
終矣の訓練とふし一作をては作中よりて越中
の馬津し他城とあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

不掃地論

東老坊

我庵者非都之辰己之徒本非爾所住心
 兮佳時者任木葉之風而還日有涉蓬生
 之露則年兮月兮花程為過季松兮葉兮
 斯遠荒果止乎測明麼無辭于茲鳥矣今
 年者迎古鄉之春而松者不忘佳育之友
 麼浮世之道麼所斷許人今者彼謂喜之
 松泉矣春者雉子之通巢居秋者山雀之
 尋時而芳野之花麼更科之月麼捨此庭

而不覓孰國矣斯言則在世人之有面自十倉
 之山莊而為似態佗我身共造庭命者不
 遺得木鏤兮直垣尔者不知枝折結兮頰
 物迫事而不得已時者恃右靴東羽之棧
 鐘而不如養其日之老栗尤在共所謂亦
 野之草因果歷然之喻事者打咳手盛之
 竅而息災也了伯父之事也栗我者好厭
 萊餃于霜夜居履夕歸于雨日則極麼着
 心於起即而喚那思六箇教栗矣栗成角
 成乍成心麼世者不有安令習所飲或時

有掃好之和尚而談給我庵止乎都之
 詠庭之氣色而世者不知無限物也
 者飽我庭之常月而此庭之更不雨而露
 度涼敷荻荻者假令有暖燄野之真共去
 此不遠過實麼美給此住居則至者卡
 庭之松風為得手揚帆心地猿耶若夫人
 情之令習遊物有好惡之變則人之飽其
 庭之結搆而有面白此庭之不掃地與我
 者飽此庭之不掃地而有面白其庭之結
 搆面白意者五五世共人來而十倍此所

也則我往而百倍其所也
 則常求結搆人者筆好紅粉之色則常惡
 蜘蛛之巢而雖自娛掃地求者皆不苦
 耶自苦而願人者可謂損之損厚哉君看
 遊不掃地人者詠其身其從之庭而願我
 宛願人宛遊心之易遊了則為得之得也
 為不信之百倍乘或翁麼劫投此理而居
 早而交角子居虛而行實與所增而論禪家
 之意地則性極樂者易了共遊地獄者難
 與哉和尚向何處去扣墨而掛一向了則

日已傾西而秋色涼。誘引縱然歸我。而
振舞雲土園之西。此中不撫敢摘尼之鬢。
度向各者奚爾揚。而不鎖例之尻。而
打笑虎溪之橋。而過矣。

○註曰。在撰。予。後。居。と。此。の。居。と。ま。ま。む。世。と。ら
ら。ん。と。し。も。七。梅。と。三。世。と。り。八。八。云。す。り。我。ハ。云。ス。云。と。ハ
爾。所。ト。書。テ。如。斯。ト。註。ス。レ。古。抄。ハ。向。シ。未。明。ナ。ラ。ス。ト。遺。稿。
夜。話。ニ。評。ア。リ。也。等。ニ。文。和。真。名。ノ。當。用。ヲ。稱。ス。レ。和。歌。ニ。假。名。
真。名。ノ。取。違。ハ。多。シ。△。例。明。歸。去。未。詳。ニ。經。乾。可。為。松。葉。
尚。存。○。真。名。ヲ。流。と。し。と。し。ん。と。む。む。と。為。の。初。心。に。
の。た。あ。ふ。く。ん。○。西。り。し。そ。の。中。に。此。人。と。い。ふ。女。百。の。初。め。と。

い。つ。か。の。め。め。く。と。や。と。を。れ。 △。山。倉。ノ。山。在。ハ。後。傳。ニ。在。リ
定。家。婦。ノ。別。在。ナ。リ。△。在。子。養。生。主。縁。督。以。身。經。註。
縁。頃。也。暫。迫。也。不。得。已。而。後。起。也。△。世。議。伯。又。ハ。甥。ノ
草。ヲ。所。ト。ハ。嫡。家。ト。庶。流。ノ。象。報。ナ。カ。ラ。渡。四。身。持。ノ。誠。下。知
一。レ。右。靴。モ。東。羽。モ。先。師。ノ。獨。子。ナ。リ。 ○。後。述。集。者。之。守
初。の。こ。ろ。に。此。れ。つ。り。と。あり。か。く。あり。あ。ん。ん。教。梅。と。三。世。及。六
我。者。ノ。起。語。リ。今。習。ハ。結。語。ニ。論。者。ノ。老。惜。ヲ。演。述。ス。
ト。云。之。娘。摩。看。心。放。起。卧。ト。ハ。例。ニ。他。諸。ノ。雅。言。リ。歌。人。連
子。ノ。豔。詞。ヲ。欺。キ。テ。也。等。ヲ。大。和。真。名。ノ。絶。妙。ト。稱。ス。レ。シ
△。去。北。不。遠。六。前。ニ。出。タ。リ。○。後。河。系。山。ノ。あ。ぢ。は。と。と。ち。や。と。の。取
来。り。け。と。と。い。ふ。け。と。と。や。り。と。先。れ。 △。左。大。仲。招。隱。詩。山。名。在
無。結。構。ト。ハ。隱。棲。ノ。無。造。作。ヲ。云。フ。リ。 △。大。惠。語。求。之。皆。苦。

敏之の位とありしとされし也

○註曰△武陵公雨トハ甚子進公雨ナリ 菟弱ノ凡雅ト温餅
 好色トハ白馬類説ニ祖公雨ノ言ナリ 當時ノ俳集ニ真
 詞アリ再奉ニ及ス △南陽雜俎淮南王始製豆腐云
 賦類ニ出スリ ○江終ニ宿僧如平ノ句ト云ル水石
 まりり子知海さるる如くともものまらり △道元
 和尚公曹洞ノ角山ナリ 都内ニ我宗ノ寺ヲ建テカラスナ
 越前ノ永平寺ヲ本山トセリト多三棒下トハ天不落ノ
 名目ノ禅語ニ似スル云ルヤ △論語ニ箒食一瓢飲四也
 不改ニ其樂 △數奇ノ字ハ和漢ノ通語ナリ 挿スニ遺稿
 ノ後話ニ數奇トハ漢文ノ好事ナリ 長キ物ハ短キヲ取ル也

圓ナル前ニ八方ヲ置テ物ノ數奇ナル故ニ茶ノ今
 數奇者ト云ヘリ 厨書ハ野ノ大茶湯ニヤキ雲龍ヲ掛タ
 懸ナリ今ノ茶湯ノ抄物ヲ見ル數奇ノ字ト訓ヲ失フ
 △家語邦有道則出而行邦無道則藏云
 使云け海を例の諺云ふるカハこのことにはい
 例の汎諫と云ふことありし一洋ノ人界の好く茶を
 とられしとありしを今ノ茶湯と云ふは此不自然
 海とれい言説の理分のみあるは豆腐と云ふ
 い菟弱と云ふはありしありしを今ノ茶湯と云ふは此不自然
 此ノ字と和語の用しとありしと云ふは此ノ字と和語の用
 此ノ字と和語の用しとありしと云ふは此ノ字と和語の用

きいしつ 佳利ノ齋と云ふ事と云ふはしつしつ
 ともんはらく 万物の事と云ふはしつしつ
 ちねたふのしつしつしつしつしつしつしつしつ
 られぬたふのしつしつしつしつしつしつしつしつ
 中々しつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ
 しつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ
 あんしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ

○註曰○嘉元百三、歎きの所あるをらと云ふ功しつしつ
 しては色と云ふはしつしつしつしつしつしつしつしつ
 山ノ落ト云う事なり △月令夏六月下ニ在り文ノ起結ヲ思

きなり △礼記月令ニ季春田獵化爲如鳥也ニ云子秋高田
 入大水ニ爲蛤也 △法花經ノ竜女成仏ノ段ニ變成男子ノ言
 あり狂言ハ例ノ粉成なり △佳利ノ齋ハ隱買ノ文買ラ云り
 輕口ノ齋ナリ ▲韓非子ニ和抱玉璞後ニ璞又先ノ玉トノ
 ○ほむけ解と例の誣語あり 如く草菴世類と歎文と凡
 同名異しめ油標とありし 如く草菴と踏踏と
 雲々同変のる程と解とありしと文心散電と云ふ
 角刀牛の釈文よりもこれを解め的中と移し命し
 ありし中甸の鼓舞と云ふは漢師のニ字ノ誤と記
 て醒酒と精と云ふは草菴の用北分のちりことと云ふ章の
 カと云ふ一作者は山室氏より越の福原ノ段ありて
 是れと云ふ山室と云ふ北能谷ありと云ふ

より申す用ちらねし事一しんけりしを
 さいら筋をのり北角といへりける幸の時北
 とあがりて利のふしに用られたる體をも
 用ふんていけりしと海をたてしえり
 しろ大島の南食よりいへりしに
 白みとまらしん書もいへりてあふゆの
 おあしとやられし海にめなれりあね松の
 のまきとまらしん書もいへりてあふゆの
 ぬくにあて格書いともいへりしに
 西の月の正なりし大御海とあつる

のふとつちの木かきしりし
 しろちくはひして麗しありし
 その祝所のけし輪ちりしりし
 とのうきと名よかりし
 けりし人間の脚と指しありし
 けりしまもかきしにふりし
 けりしと比敷の山は所なりし
 しろあり天物の鳥の慢んといへりし
 の并者よはれしりありし

て果を化物おしくりきつらむら一月とよむわ
つたのまともさうらへてい盛つひもさるゝとい
ふしといとちくもさうらむもさうらとい呼れぬわ
之果輪廻のくろくもいづれのまもさうらとい
古人の蔵ふ心のほろとゆりまをさうら肥馬
人といれしけをいづも裸がうらまをいづ月との
くもあつたといさくの中はくといさうとい
とまといといわ

○註曰▲在子應帝王儵尔忽謀報渾沌王之徒曰人皆

有七竅以視聽言食息許鑿鑿之日鑿鑿一
渾沌死之搢之世篇八渾沌ノ一氣ヲ執向
ヲ形容セル結語ノ釋身ニ眼ヲ着シ
ハ俗談ニテ料理人ノ口授ナリ ▲大師講ト傳教大師ノ授
トノ搢ス其日ハ中豆粥ノ粉糝ヲ摺鉢ニ入テ摺也木ヲ中
ニ指入シ其屋所ノ棚ニ供フ世亦ハ下様ニ起テ諸國ニ色
品アリトウ ○をさるゝといはるゝといはるゝといはるゝとい
近きといはるゝといはるゝといはるゝといはるゝといはるゝ
序語ニテ世等ヲ鎖詞ノ絶妙ト稱スシ
とよまらりといはるゝあり ▲論語ニ赤之過齊也乘肥馬
夜輕裘也 ▲世やく竹みまらるゝといはるゝといはるゝ
元も我らまらるゝといはるゝといはるゝといはるゝといはるゝ

○浮云此云とも原の二格としてあらしほん 他と
 保るに似てしけらるに 柳中本のあつてつらものと好色の
 二より形容して歳のみまふとほくもさるるまとい
 隠見の初比とふ一なるるを例のまらしてこそ也
 ともいふ所のほらふおと 社所なる平母の娘といふ人
 同の師走の娘といふいて 吾も 吾著とかん
 あつてこそしと例の終末の親はあつてしと 説談の
 絶好と移して 作者は西濃の北なる者なり
 仙石と申して 其鵜園と標号をも 柳子に
 授記のまふありとせ

良茗巻

渡吾仲

赤糸の中比のよたこことさるるあつて 黙念の中也
 葉にあらりしつと 齋にもつひのまふるまふる
 の真類あつてあつたもたつた 五教と鉄如といふ
 噴壺とさうくとあれたつたとたつた 酒家
 のつらもはつておつたつた 或はあつたつた
 作れ 唐半鏡と信名のまら茗茶あり 浮世書
 もつらもはつたつた 想思軒と信名して 長余軒
 の海ちりり 和訓と 戯事タバコトの畧名話ありしつた
 ともくぬと和唐といふつたつた 信備の頭タカのまらつた
 儒術のまらつたつたつたつたつたつたつたつた

わし着るすはあまひあまひ
又と敵ちよらるもし
し脚て佳實も客のれ
とちよるせし茶の子
し頭とさくせしま
の流るる雨のありお
増梅とまじりてお
こゝちちねあけけ
廣美人のふとど
おちろりしきと

わろけまねとくせし
とんた服部和名
まへうてしも秀と
おちろりてしきと
あひさけのまね物
あひさけの中と
まあつてしきと
とちよるせし茶
のちちちちと
ありは旅の字
しし。こゝちち

とて中すそにをかくらむあかりのきりりとありしをその〇あかり
富土寺に以てあひくらの燈のそらへまゝにしりまじりし
歎かひひけり△無心所着下八和字ニ誦方ノ舞之 林苑經
持戒ノ何故ナリ等ニ及ス△家語ニ辨物編アリ物ノ奇怪
ヲ記セリ △論語ニ酒無量不及乱ニ云

〇ぼふげんを 函亮射すしりくさ長夜を舞もつふに
もやそれも後故うらりてあはれは神のありの燈はそら
はゆかの窟きあゝせんかあらの空をのりて音の轟と
やうけんの用とそらうのふくと托物比喩として
か月の用とあらはせんとし也

猿蔵

僧一空

あらむきや猿と山王のほらうらむそらなすの
しゆとせとぞらひてうらむ猿の名とあむ
のむきと孫子の様もそらむうらむ猿とそら
ちりうらむう月のまじりうらむ猿とそら
と作りて武家の侍殿とあらむうらむ猿とそら
えうらむとそらむらむとそらむらむとそら
和漢ノ名とほらしてはらむとそらむらむとそら
それら中にも△正破の曉とほらむとそらむ
しり木曾の山王と人ともうらむとそらむとそら
せうらむと猿蔵のちたかうらむとそらむとそらむ

世の中とくうらうらう本一のあり行とほしく業の種
 とほしく勝たせつけおれおれをわらうとく類し
 かくしはゆめほあふはもいあうとてあむく
 ことごとくはくちさのけしと神宗の忠信とくしけし
 △六六第一種猿の平とくくあれうらうらうのほ
 かうれく刀は舟楫の舟おとぬんはよき心はすな
 とふらふ盤はたきあうらうしゆははし能方のあ
 あさしとのふれとくあふうとくし解をた
 らせしとくし猿おあうのふしとくしれ種種の有
 一あむしおては業のふしあうれうらうははれふ

庚申のひくつしゆりて祝さる聴さるを徳也
 しく言さるを伊川の室用あうとくすあそふ
 へくおやとくあそふ徳徳の自在とまねた也

○註田○朝詠志存をちしゆあうとくしあめとくあう
 してそのむもをて今ニ支下ハ子丑寅卯ノ各各うす十
 卜六甲乙丙丁ナリ ●垂峽ハ猿ノ各所ナリ断腸ノ詩ハ教後
 Pリ奉ルニ及ハス○古今集とくしあれきとくしとくあ
 山中にたつとくあうもあふしとくあうを接ふに此等古今
 ニ之身ノ傳授トウ去ルヲ俾談ニ種員身ハ馬ノ古又喫す身
 猿ノ古又云ハ信談平話ヲ改ヌハ例ニ我輩ノ意地ナシハ
 其取ラ能諧ノ面通味ナリトウ △後詠拾遺ニ猿ハ心機ノ
 火ナキ故ニ手脚ノ働ラ火ト成ヤト△傳灯録ニ僧向如何

得見性師の學の觀屋上有六窓内有一櫛推は△二程
全書、復轉言動の四歳より伊川の程正叔の標を以て

○得見性師の學の觀屋上有六窓内有一櫛推は△二程
らりじきと人向の世を辨むるなりと自らのおもひを
あつたなり有り買の歳あつてもあつたと伊川の歳
入敵して他語を言海のあつたなりとあつたとあつた
言ふなりと人天の両用を介し人とのあつたなりとあつた
の歳とあつたなりとあつたなりとあつたなりとあつた
の國語の若用の歳一と宇蓋の歳一とあつたなりとあつた
いそ如言由的と解して避庵は集の義用の歳
あつたなりとあつたなりとあつたなりとあつたなりとあつた

上酒氣歳

長路野洲

世よ不隣甲一力とあつたなりとあつたなりとあつた
なり程ははくもあつたなりとあつたなりとあつたなり
とあつたなりとあつたなりとあつたなりとあつたなり
に海濱よりあつたなりとあつたなりとあつたなりとあつた
を今とあつたなりとあつたなりとあつたなりとあつた
きよよあつたなりとあつたなりとあつたなりとあつた
なりあつたなりとあつたなりとあつたなりとあつたなり
かきあはれとあつたなりとあつたなりとあつたなりとあつた
このあつたなりとあつたなりとあつたなりとあつたなり
のはあつたなりとあつたなりとあつたなりとあつたなり

能やしの時らも位うえを非ぬを神の朝とふに
 串海軍折海軍の名とありまひりふて水の波
 えくかこれ海軍の名と録をたぐと朝鮮人
 とも價とあらそふちりて見より言彌綿
 野くこくみちとあそふのあやとあり
 海軍の軍人たしりらつて神農もあ
 せんてみ後と神の信もて軍の都へ入る
 ちまふか加茶とあはれとていさる色とめ
 らふかたわい海軍の軍王とていさる色と

の富しああるの富ともいれりて此と酒とを
 海軍の軍も海軍とあはれとていさる色
 海軍の軍も海軍とあはれとていさる色
 海軍の軍も海軍とあはれとていさる色
 海軍の軍も海軍とあはれとていさる色
 海軍の軍も海軍とあはれとていさる色
 海軍の軍も海軍とあはれとていさる色
 海軍の軍も海軍とあはれとていさる色
 海軍の軍も海軍とあはれとていさる色

○註曰○海軍と發句ハ湘東ノ許六作ナリ○口重集とて此
 はけさつむとありてちりちりて海軍とていさる色と

河上ノ周顛カ倭隠リ海軍ニ海塩ノ膏ト知リ△能登ハ海軍
 々各産アリ海軍ニ八干シテ刻々揚ナリ△戦國軍目録ニ晉
 桓公ノ臣ナリ百味ヲ知ラ料理ノ人ナリ△神農ノ古又ハ前ニ出
 △孟子海軍ニ王篇ニ君子遠クを厨^ツ法^フ△宮モ董^ニ大將モ海軍
 ニ好色^ク海法^ニ多シ早覺^ハ海軍^ノ香^ニ向^ト重^ト人^言言ナリ
 ○宋^チ子^ハ後^年年^ノ人^ハ山^ノ井^北あ^そく^と人^を
 二^カ上^カ揚^ク△梅^のを^下に^ほれ^レの^操文^{ナリ}前^ニ出^{タリ}
 △傳語拾^取ニ^高平^を所^ノ國^領ニ^礼和^善忠^得と^云フ
 ○漢^ニ云^フ儀^と勸^懲の^二用^とか^の一^ト坊^と上^陸の^酒居
 と^稱中^ニを^海軍^の軍^規と^{ナリ}一^好と^自己^の放
 持^と一^好と^自己^の建^スお^ろク^テ一^好と^自己^の通^の
 道^途と^{ナリ}一^好と^自己^の形^容と^{ナリ}一^好と^自己^の

と油漬の筆格くつし産安の歳とつしつて

○記類

紙金記

芭蕉翁

たいはくくたえぬと中より半妃のくつしつて
 志とつし高傳とくつし綿衣のおれとくつしの上うた
 舞の巻とくつしおとくつしおとくつしおとくつし
 くのつしとくつしおとくつしおとくつしおとくつし
 らんやとくつしおとくつしおとくつしおとくつし
 け録のぬとくつしおとくつしおとくつしおとくつし

山下の妻といひ臥めたる女の心せむしうして
おの國空しくふちもあらんははらりしを
越汝の浦くし殿御幸の控めし二つとあふの
月とやこしき逢ひのちをわののちと。おれり
のまろくをさすてをらさくしとあの中いおれ
とる余つた候那とつたり孫と歌とさるく
とれ國大地の府いりりあひいりめしと
命の控とやあつるふれいあさあめり
とらあ

○註曰●長恨歌、非羽朝車、寒寒、誰、下、五、八、云、唐詩解、二、四、余、
故格、作り、●文選、詩、文、練、双、此、尊、崇、裁、為、一、合、歌、神、

●白氏文集之五夜中新月、色三千軍、外、故、人、心、○新、
まろくもいれやあおのさむりいさかじきひり
おれ

○評ふけ記々之福のくしも奥のり抑し三越より貴僧
とあし伊勢の遷宮し治めし時せらるる如行り人
と行りさらふあありしも念にけ記とわし今も家
の書も路通も越人も記とわし今も竹たさ幸
とらうもまされまゝとわし今も二巻の文と四巻と

何尾亭記

井主重平

こころはち一把のさし庵とかかへてあはれ
こころはち一本のさし庵とかかへてあはれ

まじく商家のつとめあるらんと申中の重んかむ
と色らから商家の店におく。せとらるるゆらうと
あねもえよあふ稲葉山の林よりしてかむをと
さらりよりあふはうり茶よあふか指圖とのか
はままに曲座とはまをく。膝もと二重のあむ帯
あねの沙女健すのたふらねをえと此火も。漢子も此
あふまゆらふまをえとねとくは高きしけけぬ隣
の寺此はくかむ存と業のむ此當しはひおて世
く。破らぬの体教奇も一なる二なる何とあふ
岸の山吹もむ堤のき人あふ。我とあふ。此名と

夢して。夢入。例ぬらたぬとあふ。む。ま。い。い。を。い。む。の
紅白ある事と向きしはく。は。世。の。見。も。あ。い。よ。あ。ふ。ま
の。西。北。東。下。あ。う。る。名。の。あ。ふ。ら。よ。も。い。ひ。か。ら。む。か。は
あ。や。う。れ。ら。い。ん。と。一。節。の。奥。と。ま。い。ら。し。け。い。の。世。信。
と。あ。ね。も。え。よ。あ。ふ。ん。け。い。と。あ。ふ。ら。は。い。は。ま。ま。二。運。二
の。は。ら。房。し。け。い。と。あ。ふ。ら。は。い。と。何。ん。か。何。庵。の。二。子
と。頭。と。い。ら。う。と。橋。の。あ。ら。は。ら。ま。た。い。か。り。ゆ。ら。の。音
か。ま。風。も。何。れ。の。尾。ら。い。か。く。あ。い。ら。ら。と。い。ま。い。
の。あ。ら。う。ら。あ。い。と。あ。い。ら。う。と。あ。い。ら。う。と。あ。い。ら。う。と。あ。い。ら。う。と。
現在の利用を求あう。ゆめ念ふ。も。あ。ふ。の。あ。ら。は。い。

未東の因縁とむじむじとまらるも尾を怪しむる
 何の尾ありのもしもやと何とさうはむる
 一こ子孫のほやとあり我とと那の尾と
 ありてありけりあひの老傍とありて昔比布に
 山棟の古凡あれとと茶枝まゝととあまをてまは
 茶葉子此未の園子とてかのかあむりしと掬れ
 ありけり得頼の掛をよととこの枝此處ありて
 もあまもある茶人うあむと世帯のりよととれと
 くらねもあむとまをたれ何の尾もをさ地まね
 一ととむじむじにあまより此かこのまらあれらら

拙と我と茶人も能人も海へ後生を福ふ人とい
 い尾とてぬんとはく一おあちり命一

○註曰仙傳ニ有皇公ヲ莫ハ前山ナリ ○表撰キハ前山ナリ
 △店れく竹喚子まのり村よ返龜法と何とあふとよと
 あり梅え此有海外の画居ラ云ハトテ世帯はラマ子ヲ
 云い起漢子身ニ返龜ノ意ヲ結ル詞ノ鎖ハ更ニシテ
 世帯ノ舞ヲ論ヒシハ無心所着ノ絶妙ト稱ス △測明カ
 多事ヲ急セシ直ハ細茶スルニ及ハス梅スルニ世帯ハ前山ナ
 ト云スノ前山各ヲト云フ所ハ前山ト欺トノ御音ヨリ無理ニ
 古人ヲ粉成スル意地ノ塵埃ハ多ニ知キナリ ○茶葉子此未
 一ととむじむじにあまよりあむりしととれと
 一ととむじむじにあまよりあむりしととれと

とてうらうらとあそび △昆布ニ山椒よふ事とト云ふは狂言
ノ釣瓶ニ酒を司ノ詞ナリ 按スニ瓶ノ系固子ハ馬糞ノ糞ナリ
ト臺部ノ音咄ナリ 彼物トハ隠見ノ法ナリ

○源公計記と虚実の常用といふはさうさう何尾のうまを
頼むるに才一と歌人の艶曲ノ敵一才ニ系固子の風は
とこあそびを命とて他借のまじり也作夜と云ふは
他もあそび傳傳のまじり味うて自己の名利とくらし
めり他人の心也と云ふはさうさうと云ふの字格ナリ
若しへまをさの虚実あり作夜の短歌と云ふは
ありてけりり撫子行の先折也

二方樓記

桐尾角

け樓と二方とふ事といふはさうさうのれがめ地
の大親あれいせまうるにありしは素素と云ふは
ありし風新くなくしゆし翰と云ふとあそびるは
まのあそびもあそぶと云ふはさうさうの風新と云
ふむがそもあそぶのまじり也あそびはありと云ふ
あそび又人の見をあれいしゆしぬぬ人の中な何の言
きしと云ふはあそび下えりしゆしゆしゆしゆしゆし
らと云ふはさうさうの風新のまじり也あそびるは
ありしと云ふはさうさうの風新のまじり也あそびるは
ありしと云ふはさうさうの風新のまじり也あそびるは

廣矣と言況の遊ありと云くは樓のあるを
あして山水一帯の優格のありや又ア者二方の
とありむいふあり

○註の△岳陽記街遠山香長江此則岳陽樓之大觀也
屋を竹月花をのめ月をるるおくと○おいらは耳
まゝとまゝの時さあひらるやゆきあさん 宿備酒徳頌
二豪侍側車如螺臺舞多頓眩云

○傳云け江にまゝ食しあやゆりてんし連船の處を
そよよやとらるや盃の換おとあして柔婉の
洒落とまゝやとらん例し他語の頓挫あること
作者を江の湖亭と考へては時と依の相川と伝たり

と又鑑よたの姓中ありて和漢と通稱の文人あり

壺中園記

東荅坊

昔々遊越之新深而頃者水無月之半端
也栗竹在送暑日則鑑亭迎涼後歷不尤
有而磨江山清絕之地而謂下有乏以雅
處矣或曰者遊蓮咲寺而孟詩十六宵
之影了或夜者泛月涼敷江而船遣二千
里之心了其友者名傑于詩了月出千歌
了謂以流使人醉矣半我且漂其地而中

來不能諧之人，則獨有左角之野，而年未及
之十，乘于然，知渡世人之實，而識遊文月
之虛了，則出而有漆，花鳥之色，而教昭公
之千金，舞兮入，而有澄月雪之心，而盡顏
子之一瓢，他兮奚爾，則我家之俳諧，而斯
者遊虛空，乘見綴希有之男哉，共其頃者
若了，則思置等雨，事未矣，其後過十年了
共不備，其人之行，未則左在那所覺，九許
社止乎，此頃見雲鈴之狀，則依渡之浦山
陰，有和漢不思議之壺，而眼則有月花之

別世界與哉，念時假同連之遠，同鏡而延
是寄万里之情了，則誠哉園林備四季之
花鳥，而其口者吞雲夢之八九兮，其真者
過蓬瀛之五之兮，况夫黃金之花，叹了其
國之山，副近了，則花亦有不待初櫻之春
而月亦磨忘紅葉之秋，鳥矣言則飽菓珠
之八珍，而為待鬼車之之會，乘其筆者騷
人雅士，而壺中之主者，例之左角也，未

○註曰：行在八慈竹亭，鑿亭八七里，別觀十何王新
浮沉騷ノ各アリ。●白氏ト二千里ハ前ニ出スリ。●司空曙遺

かゝる佐おの御名あう木の片れあのかく悲れ
い天運の本後しけけの用あり一はして仲電暖
の遠るをうとるもあふ山もあふかちを電
の白根を居よめやうよふふこころい便利也
此等しけありておちや碑の山くも井原を
林下れとらまはに喜枝の色をんこわく陽の
の蔭をすゆちり一たさよ雄非川の清さを
小泉部を月の下に布りてさ原さを那のさ
くまうすやうち縁よらとあまうと山とあいに春
さうかた[△]東陽もまらる一まやまら様所の山はさ

く百よれをれとんはらわいつくおをれけらとる
て此田の片と音とてあふより指授らぬと勢さ
にらり一況や東嶽の月のあふと義則とめ人此
言らもあふとんはら書の日せ又ちりに清あはま
かゝるしとをも今や新ぬめらあふとやまも^{アホス}新川
此等よあをるをかめ[△]新谷の西本もあしれん色
さうに和漢とをらあふ一とてを我に此様さ
比ふ運二層の等とてさうけなく清冬のおり帯
とかけく名もさうよ[△]平酒葉もあうとさ[△]まに之操
めるの指をえりしとて[△]椿葉と例し和漢の指

○ 傳云 龍と虎をあいさして海を曲第一解
 して中をむしるをさるる面の風車に口を子の部おとさ
 してくして令く餅鮓とてふとと禁と抑ととの
 誼諧より百世と兩名の世とあたるを記文の
 起結ちりに編錫の河原と文のちりりてはと
 鼓舞のさきさきとてふ一作者と裁の石^{スル}功
 伝もお井と申して棒葉と標号ありかかて
 先師の指はく觸着く儒書を経よあさし和音
 連歌よこころ今北選場よ名と称する

唐林通美の人とてふこと

水滸傳卷六終

